
恋姫無双～最凶の親子～

バルバトスに対し多大なトラウマを持つ人（改）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋姫無双〜最凶の親子〜

【Nコード】

N1790Z

【作者名】

バルバトスに対し多大なトラウマを持つ人（改）

【あらすじ】

皆は知っているだろうか。若本さんの代表的なキャラであり、理不尽な攻撃とダメージを与える最悪なキャラクター「バルバトス」を。この小説は、その「バルバトス（？P仕様）」の力を得た男と「バルバトス」の親子が繰り広げる、理不尽な無双劇である。「ぶうるああああ！息子は誰にもやらああああん！」「少し落ち着くのじゃあああ！」「／／／／／この小説に登場する「バルバトス」はご本人となんら変わりありませんが、ご本人ではありません。そして親バカバルバトスとなっているので、「そんなバルバトスは

認めにイ！」という方はどうかブラウザバックを。そしてこれは、
「真・恋姫無双〜最強（凶？）の武者〜」の改訂版でもあります
露骨な宣伝いやらしい

プロローグ

「マジすいませんでしたああああ！」

気がつくと、360°。真っ白な空間にいて、見事な土下座をしている金髪の女性が目の前にいた。

「……………え」と、どういう状況？そしてなぜ土下座？すげえ見事だけど」

「あ、土下座は慣れてるんです」

「どういう人生送ってるんですか？あなたは」

本当に気になる。気になるといえば

「そういえば、ここはどこですか？俺さっきまでアイツらと一緒に宴会してたと思うんですが」

「あゝ、ここはですね」

金髪の女性は、かなり言い難そうに口をモゴモゴと動かしている。時間にして数秒程経っただろうか。女性は何かを決意した表情^{かお}で俺を見ると、口を開いた。

「一言で言えば、《あの世》です」
「……………ですよね」

なんというかかんというか、予想通りすぎる答えだった。というか、こんな状況に自分が陥ることになるとは予想外だ。できればアイツらを陥らせてほしかったね。うん。

「意外と冷静ですね？怒り狂うと思ったんですけど」

「いや、アイツらと付き合っただけなら沸点はかなり高くしとかないといけなかったのだ」

「ああ、あなたの友人のことですね。彼らのことは、ここでも有名ですよ。毎年毎年、「コイツらどうするよ？」会議やってましたもん」

「アイツらの存在はそこまで問題なのか……」

たしかに無茶苦茶な連中だが……神様？達の間でも無茶苦茶な連中として認知されてるのか。

「で、俺はこれからどうなるんですか？」

「とりあえず、転生ですね。無論チートで」

「そこまでチートなのはいいかもしれませんが」

「あ、それではチートはこの紙に書いてある中から選んでください。それと転生先も」

そう言つて金髪の女性は、一枚の紙と羽ペン（初めて実物見た……）を渡してきた。

「えーと、転生先。1、武将が全員女になっている三国志。2、女しか使えない兵器を扱う学園に転入。3、真剣で女が強すぎる世界。4、運命。5、そげぶ……隠してないですよ？コレ。そしてなんですか、「そげぶ」て」

「うん、ゴメン。その紙書いた上司の趣味」

「大変な上司ですね？」

「ううん。君に比べたらまだまだだよ」

たしかに、アイツら以上に大変な人間がいるなら会ってみたいと思う。ただし、そこまで深く関わりたくないが。というか、アイツ

ら以上の奴らと一緒にいたら、多分俺の精神がもたない。
とにかく、気を取り直して紙を見る。

「そこまで個性が強くない人達と一緒にいたいので、1ですね」

来世くらいは静かに暮らしたいと考え、1を選択した。理由？そのまま田舎とかで静かに暮らせるかもしれないからだ。それ以上の理由はないね。

「さて、能力はなにがあるんでしょうかね。1、バルバトス（？P仕様）。2、鬼巫女（？P仕様）。はて、気のせいでしょうか？なぜか両方とも？P仕様なんですが？というか、どっちを選んでも変わらない気が」

「すいません。上司の趣味です」

どうやら、来世も静かに暮らせないらしい……………。

「もう、1で。比較的こっちの方がいいので」

「ですね。あ、容姿などはコチラが設定するので、なにかご要望は「平凡な容姿で」

「……………即答ですか」

ちなみに、答えるまでのタイムは凡そコンマ7秒だったらしい。

「それでは、この門を潜ればその世界へ行けます」

金髪の女性が指を鳴らすと、かなり大仰な造りの門が現れた。
ギィィィ……………と、雰囲気のある音をたてながら門は開いていき、中には虹の渦のようなものが渦巻いている。なんというか、ドラ エの旅の門みたいな感じだ。

「平凡に暮らせませうに……」

そうつぶやき、一気に門の中へ飛び込んだ。

転生完了。だけど父親がこの人って！？（前書き）

不定期な更新になると思いますが、よろしくお願いします！

？「今更遅い！」

ごめんなさい！お願いですから「ジエノサイド・ブレイバー」だけは勘弁を！

転生完了。だけど父親がこの人って!?

目を覚ますと 真っ先に見えたのは、あの有名なバルバトス様でした。

「ば……ばぶ? (ど……どゆこと?)」

「おお、起きたかあ」

生の若本ボイスに若干テンションが上がるが、今はそういう場合ではない。そしてなぜ俺は赤ん坊になっている? まさか俺、食べられる!?

「おぎやあああああ! ? (食われるうううう! ?)」

「まったく、そう泣くな。取って食うというわけではあない」

「ば、ばぶば? (そ、そうなんですか?)」

「一気に泣き止んだなあ」

バルバトスさんは、少し呆れた声で言う。

さて、身の安全は確保されたわけだが、今の俺の状況がよくわからない。まさか、俺はマジでバルバトスさんの息子として産まれたのだろうか?

「ばぶ? (そこんどこどうなんですか? バルバトスさん)」

通じないと思うが、なんとなく聞いてみる。すると

(いや、通じないですってば)

「ばぶ! ? (誰! ?)」

頭の中に、誰かの声が響いてきた。

（私です。あなたを転生させた）

「あぶば（ああ、あの金髪さん）」

（いや、私名前あるんですけど………。私はセラスです）

金髪さん セラスさんは、少し呆れながら自分の名前を言う。
今思えば、あの場所で自己紹介をしていなかったと思うんですが、
そこんとこどうなんですかね？

（特に問題はないと思います）

「あぶうゝ（心を読まないで）」

（それと、心の中で念じれば通じますよ）

「（こう？）」

（そうです。それと、今のあなたの状況ですが まあ、今から
情報を送るのでそれで理解してください）

セラスさんが言うと同時に、頭が少しチクリと痛んだ。

情報によると、俺は転生した先の両親が早死にしまい、その
両親の親戚であるバルバトスさん（真名が本当にそうらしい）に引
き取られた、ということらしい。

「（で、一つ気になったんですけど、今の俺の容姿って）」

（すいません。またも私の上司の趣味によって ）

「（ああ、バルバトスさんにされた？）」

（「バカテス」の秀吉にされてしまいました）

「（なんでさ！？）」

予想の斜め上をいく返答だった。まさかと思うが、セラスさんの
上司ってシヨタコンですか？

（なんでも理由が、「その方が面白くね？」だそうです）

「（その上司に伝えてください。「あなたはいつか殴る」と）」

（安心してください。もう既に私が殴っておきました）

「（ありがとうございます）」

（いえいえ。普段のことも含めて殴っておいたので、こちらとしてはラッキーです）

そう言うセラスさんの声音は、かなり嬉しそうだった。どれだけストレスがたまってるんでしょうかね？まあ、それは置いてくとして

「（あれ？そういえば……。赤ん坊からスタートということは）」

（すいません。一応記憶などは消させていただいたので、我慢してください）

「おぎやああああ！？（マジかああああ！？）」

「うん？まったく、よく泣く子どもだ。まあ、それでこそ俺の息子だなあ」

恐らく、前世を含めても本当に久しぶりの絶叫だったに違いない。というか、そうだろう。そしてバルバトスさん。あなたは見た目より良い人だ。

（まあ、食っちゃ寝してればすぐですよ）

「（そうなることを祈ります）」

そこで、セラスさんの声は聞こえなくなった。同時に、かなりの眠気が俺を襲う。

「ふああ〜（ねみい〜）」

「ふっ。よく寝ておけえ。「寝る子は育つ」からな」

「あぶ」(お休み、父さん)」

そう言っで、俺は目を閉じた。新しい世界を楽しもうと考えながら……

転生完了。 だけど父親がこの人って！？（後書き）

次は恐らく、設定を更新しようかと思っています。

設定 最凶親子について（前書き）

感想などをお待ちしております。というか、それが作者の原動力です。

設定 最凶親子について

紅鬼

真名 秀吉

性別 男、ではなく秀吉！「おい作者！」

「バカテス」で有名な、第三の性別「秀吉」をもつ秀吉と完全に同じ容姿となってしまった男。

「バルバトス（？P仕様）」の力を得て転生し、ぶっちゃけアーマーが剥がれず、攻撃がほぼノーモーション。

カウンターは一応使えるが、時々仲間にまで被害が及んでしまったため、理性でしないように頑張っている。

拳でも十分強いため、武器を使う機会が少ない。というか、使ったら被害が尋常ではない。

主要武器は、いわずと知れた「バルバトス」の相棒、《ディアボリツク・ファンゲ》。

自身の容姿のことと考え、最近はジジイ口調を意識しているのだが、ツッコミを入れる時などは素に戻る時がある。

目下の悩みは、父親の親バカ化。

紅乱

真名 バルバトス

性別 男、ではなく漢！「わかってるじゃないかあ。作者あ」

いわずとした、「バルバトス」ご本人のそっくりさん。というか、性能もそのまま引き継いでいるという、もはやご本人。

あまりにも強すぎるため、戦場で会う人間の半分以上は逃げる。

世間では「戦場で会ってはいけない漢」と呼ばれており、「無双漢」という二つ名をもつ。

秀吉を実の息子のように思っており、大切に思っている。

主要武器は、普通の戦斧かと思いきや、両手専用なのに片手で扱っている。

最近、秀吉に対して求婚してくる輩が多く、その度に「ぶうるああああ！俺以上に強い奴でないと結婚は認めえええん！」という叫び声とともに「ジェノサイド・ブレイバー」を放っている。

これは戦闘ですか？いいえ、一方的なバル様無双です（前書き）

いつもどおり、ぶれない駄文です。

そしてやはり情景描写は苦手、というか殆ど書けない。

これは戦闘ですか？いいえ、一方的なバル様無双です

転生してから、早いものでもう六年が過ぎた。

セラスさんの言ったとおり、たしかに赤ん坊のころの記憶は殆どない。だがしかし、なぜか時々思い出してしまい、頭を抱えることは少なくない。

「どうしたあ、秀吉。ブーツとして」

「ん？いや、考え事をしていただけじゃ。父上」

「そうかあ」

そういえば、なぜか俺の真名は秀吉となった。なぜこの真名にしたのか、理由を聞いてみると

「そう名付けると、お告げのようなものがあつたからだ」

らしい。というか、そのお告げをした人ってセラスさんの上司じゃないだろうか？

まあ、それに影響されて最近はジジイ口調を意識して話すように心がけているのだが、なんとまあ難しいことだろうね、ジジイ口調。原作で秀吉がよくあそこまで話せると思うよ。

「よおし、着いたぞあ」

「お、ここが盗賊どもの住処かの？」

そして今、わし達がどこにいて何をしようとしているのかと言うと　こないだ泊まった村の村長から、近隣を荒らしまわっている盗賊達を討伐してほしいという依頼が来たため、その村の近くにある森の中を突き進み、そこにある山？らしきところに着いた。

「まったく、面倒だなあ。これだから弱い奴らは……」
「いや、父上がそれ言つと色々と終わるのじゃが？」

ビシツと掌でツツコミをいれる。まあ、わしも人のこと言えた義理ではないかの？

とりあえず、どうやって侵入するかを考えようとしたのだが

「шыらくさいわああああ！」

という父上の声とともに、門があつた所からチュドーン！という爆発音が聞こえてきた。……って、はい？

「父上ええええ！？何やつとるのじゃああああ！」

「考えるよりも行動だあ。よく見ておけえ、秀吉。これが戦いだあ」

「いやいやいや！父上のは最早戦いではないぞ！？もはや蹂躪じゃからな！？」

「ぶうるああああああ！」

わしのツツコミをスルーし、父上は早速戦斧を振り上げて盗賊の住処の中へ突撃していった。

「……わし、どうすればいいじやろうか？」

ポカーンとそれを見ていると、後ろからパキツと小枝の折れる音が聞こえてきた。

反射的に後ろを見ると、そこには

「おいおい。こんなところに上玉がいるじゃねえか？」

「ふひひひ。か、可愛いんだな」

「おいおい。お前こんな子どもがいいのかよ」

下品な笑顔を浮かべた、ノッポ、チビ、デブの三人の盗賊がいた。

「うむ。死ぬがよい」

笑顔で言うと、ちょうど背丈が同じくらいのチビに近寄り、ドゴン！と拳骨を頭上に落とす。すると、そのチビは脚から地面に埋まつてしまい、ちょうど生首のようになってしまった。

「え？」

「え？」

「なにこれ怖い」

「じゃ、さよならじゃ」

「「はい？」」

呆けている二人に対し笑顔で言うと、拳を固める。

「これが漢の……振り上げじゃあああ！」

「「アポロオオオ！？」」

『漢の振り上げ（verアップercut）』を放つと、二人は星となった。キラーン。

「さて、わしも行くかの」

三人のことは記憶から抹消し、わしも盗賊の住処へと入っていった。

「あゝ・・・・・・・・まあ、予想通りじゃの」

あちこちから断末魔のようなものが聞こえてきているが、もういつものことなので慣れた。というか、もう人死にも慣れた。

なぜなら、赤ん坊のころから人の死体を見るのはしょっちゅうだったからだ。

なんでも、父上はかなり有名な武人らしく、その父上を倒し名を上げようとする者も少なくなかったため、四六時中挑戦者が絶えることがなかったためだ。

「しかし、この広さではどこに村の娘達がいるのか」

村長に頼まれたもう一つの依頼、それは攫われた村の娘達を取り返してほしいというものだった。まあ、盗賊どもの殲滅は父上に任せるとして、わしは娘達を探すかの。

ということで、盗賊の生き残りを求めてそこらへんを彷徨い歩くことにした。したのだが　なんとつかまあ、生き残りは絶対にいないであろう惨状が見えるばかりだった。

「うん？」

ふと、どこからか誰かがすすり泣く声が聞こえてきた。よく耳をすませてみると、その声はちょうどわしが通り過ぎようとしていた穴の中からじゃった。

「ふむ。ここか」

念のため警戒しながら穴へ入っていくと

そこには複数の女

性がいた。

衣服こそボロボロなのだが、乱暴された形跡は一切ない。

「おおい。助けに来たぞい」

わしがそう声をかけると、泣いていた女性達はポカンとした表情かおでわしを見てきた。

まあ、気持ちがわからんでもないが、さすがに予想通りすぎるリアクションなので、苦笑してしまう。

「さ、とつとここからでるぞい。でないと、父上がここを灰燼に
してしまいかねないからの」

「あの、父上つて……」

「ああ。「無双漢」と言えばわかるかの？」

「「無双漢」って、あの？」

「そうじゃ」

父上のことを言うと、質問をしてきた赤毛の女性以下、全員が顔を青ざめたりしている。まあ、無理もないがの。

「さ、とつと出るぞ」

『はい！』

全員、息の合った返事をしてきた。やはり、まだ死にたくないようだ。

そして、皆を連れてここから出ようとした時だった。

「おらあ！」

生き残りであろう盗賊の一人が、わしに襲い掛かってくる。

しかし、慌てることなくわしは

「む？」

二本の指で白刃取りをする。そして、そのまま盗賊へと拳骨を落とす。

「あべし！」

なぜか、世紀末の断末魔を言いながら盗賊は地面に埋まる。

「さ、行くぞい」

『sir! Yes, sir!』

……なぜ軍隊式の返事をしてきたのだろうか。そしてなぜ英語を使える。おい、その赤毛さん。なんで顔を青ざめてるんだ。

かなりの疑問を抱えながらも、わしは女性達を無事に外へ脱出させた。ちなみに父上はというと

「ぶうるああああ！」

戦斧を掲げて雄たけびのようなものを上げていた。思わず拳骨を落としたわしは絶対に悪くない。そう、絶対に。

村に戻ったわし達は、村長から依頼の報酬を受け取ると、颯爽と村から去った。

「さて、今度はどこに行くかのう？父上」

「そうだなあ。「江東の虎」に会っておくのもお、悪くはないな」

「江東の虎」。たしか、孫堅のことだったはず。ということは、まだ孫堅は死んでないらしい。

「では、行くかあ。「呉」へ！」

「応！」

そう返事をする、わしは父上の後を追う。

いつか、父上以上の武人となることを夢見て

「つて、わしもう既に父上越えてるのではないか？」

色々つぶち壊しなことをつぶやいてしまっわしじやった。

これは戦闘ですか？いいえ、一方的なバル様無双です（後書き）

感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1790z/>

恋姫無双～最凶の親子～

2011年12月7日22時49分発行